他方、昭和三年坂本龍馬、昭和四年中岡慎太郎の各銅像、昭和七年青木猛比古の碑が建立されています。坂本龍馬の銅像などは、地域の青年団によって、青木猛比古の碑は、南海部郡教育会によって造られています。

それぞれの沿革、解説はさしひかえますが、歴史年表、碑文などを充分読んで、各自の推測、判断を下していただきたいと思います。

ともかく、昭和の初期は、われわれ日本人が、アジアに世界に一つの理想を抱いて、勇往まい進していた、いわば日本興隆の時代だったのでしょう。

われしたち、昭和元禄に生をうけている者は、忠魂碑、記念碑の碑文をいま一度読みなおして、西南之役、日清、日露戦争、太平洋戦争に戦死されたかたがたに感謝を捧げるとともに、その冥福を切に祈らざるを得ません。現代の繁栄も、英霊の御加護によるものと思われます。

（終）

踏査記

石神峠を往く

高水嘉吉
（会員・佐伯市蒲原）

石神峠を境として佐伯市黒沢と、宮崎県北浦村三河内を結ぶ林道が開通して、車が通れるようになったのでこれを踏破したいと念ていたがやっとその機を得て、七月二十日長男に車を運転してもらって出かけた。深矢勘蔵、岩田正城両会員に同道していただいて、案内と説明をお願いした。此の道は陸路峠の道と共に、古来三河内と佐伯地方を結ぶ要路であった。

舟形で富辰神社を拝して佐伯惟治を偲び、大永の昔惟治主従二十余名が、孤影悄然と日向落ちした足跡をたどりつつ車を進めた。立派な道が開通しているが永た路面が固まっておらず、先般の長雨で路肩の崩れている所もあって、一寸ひやひやする所もあったが、安全順調に峠に到着した。天気はよい筈であったが、ちょうど大峠は霧雨で煙っていた。ここで深矢会員に説明してもらいながら展望する。

惟治主従が三河内落の前しばらく足を止めたと伝えられる馬場の尾は、深い谷をへだてて右方指呼の間に望見される。羊腸の新道と並行して左方山の才バネに旧道が続いて、新旧の峠は殆んど同位置である。三河内側は水口、大井を経て中心地梅木へと道が通じているわけである。

峠からの眺望を十分楽しんで愈々三河内に向って車を進めたが、しばらく下るとがけ崩れのため道がふさがれて行手をはばまれる。三河内に心を残しながら引返すことになったが、石神峠を踏査しただけで一応満足した。

実は惟治主従の最後の足取りを探るための此の行であったので、以下若干これについて共案して皆さんの御批判と御ぎたい。

忠実柳年社城の攻防がいつ開始されたかである。私は大友勢

廃記の深田・野々下両人討死の後をうけた、

「其の後白井近江守長景を侍大将として文永七年十月上旬に佐伯梅牟礼城に差し向けられる。」

をとる。

梅牟礼城の攻撃の開始を十月上旬として、梅牟礼の攻防に十余日、惟治主従が思沢につき唯弥四郎の家や馬場の尾に滞在したのが十一月上旬まで。梅牟礼実録によれば惟治は馬場の尾に俄作りの小屋を作り、家来を変装させて府内の様子をさぐらせたが、もとよりよい聞き出しもある筈もなく、又寒気断く厳しく耐え難くなったので、薩州の島津に身を寄せるため日向に入ったとあるが、地勢から考えて石神峠を越えて三河内に入ったのであり、これは十一月上旬であろう。

人友興廃記・梅牟礼実録その他の記録は、概ね惟治主従は三河内に入るとすぐ尾高千に差しかかり、永襲した三河内勢に打ち滅ぼされたとしているが、これはうなずけない。尾高千と石神峠は反対方向でかなり離れているし、十一月二十五日を考えた時二十余日の空白が出来るからである。三河内に於ける惟治主従の足取りについては、羽柴幹事が昭和四十年九月十九日の三河内踏査の案内記に考察しているが、私も大体それに賛同するものである。

石神峠から三河内に入った惟治主従は、木口、大井出たりで三河内人士の敵意を感じて再び山中に入り、明石峠を越えて九市尾に出で、越田尾で恵天頭市右衛門に出会い、共に悲惨な最期を遂げたと伝えられている。将監がどの道を通り其の距離がいくらであったか知る由もないが、恐らく尾高千から石神峠を越えて西野まで、十余里を走って生命を果したのであろう。

又第十四代佐伯惟定が、天正十四年十二月下旬三河内に攻め入り、守将甲斐宮内を打ち取って引揚げている。甲斐宮内はさきに勅使の一員として佐伯に来り、番正剛に要撃された際水中に身をおどらせて、唯一人脱出した勇士である。

惟定の軍勢二千余人がどこから三河内に入ったかはつまりしないが、梅牟礼城から最短距離の石神峠越えをしたものと思う。

西南の役にも、三河内の薩軍を制圧するため悪沢から官軍の一隊が石神峠を経て兵を進めている。

(三)九市尾・葛京、波当津、直海、市振、古江等に往来するに便なること。

等人利点を察してここに仮住居を営み、乏しい生活の根拠としたものと思う。然し尾高千での生活は不自由を極め、中でも食糧難に悩んだことであろう。前記人間々に侍臣を出して食を求め、或は舟を求めて脱出を計ったが思うにまかせなかった。

そのうちに白井長景の意をうけた三河内の新名党に住所を発見され、十一月二十五日早朝包囲攻撃され、主従悲惨な最期を遂げたと考えたい。十月上旬の梅牟礼攻囲から五十余日の出来事とすれば、時間的にも当を得ている様である。

惟治の侍臣の一人混谷将監は惟治人意をうけ、千代鶴に連絡するため重囲を破って脱出し、惟治を慕って城村から三河内に向いつつあった千代鶴の一行と西野で出会い、共に悲惨な最期を遂げたと伝えられている。将監がどの道を通り其の距離がいくらであったか知る由もないが、恐らく尾高千から石神峠を越えて西野まで、十余里を走って生命を果したのであろう。

以上の様に、この柴は古来多くのつわものの足跡を残した所であるが、黙して語らず同郷の士の訪れを待つもの様であった。

駄句二三。

つわものの　足跡空し　柴路
霧雨に　馬場の長ノ松　影おぼろ
柴にて　大水を想い　感無量

（おわり）

（21ページよりのつづき）

合流した。

（附記）これは天田柳雲先生の「太閤記」より抜萃したもので、よくしらべつめて書いてあると思った。本文は軍評定の場と番匠岡に使者を斬る場を主とし、その前後は略記した。

この文中、切畑が茶屋とはどこ附近にあったのであろう。又番匠ノ瀬とはどこであろうか。おそらく柴野附近ではあるまいか。詳しい方から何かの機会に教えてもらいたいものである。

（以上）

（完）

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土研究クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

（五）葛港

はじめに——葛の地名

一世紀も二世紀も三世紀も昔から河川に発生した港は、ぜんぶ海に下りてきた。それは日本の狭い山がちな地形からくる必然的な運命であって、ひとり佐伯地方だけの現象ではない。まだ河川に港があるとすれば、余程の特異な条件がそろった所で、あってもその経済的な力の程は論ずるまでもないであろう。最上川、利根川、木曽川、淀川にできた港等、すべてその例外ではない。こうした日本の河川に比して、ヨーロッパの河川は全く対照的で、道路交通、鉄道交通と共に国内や国際間を縦横に連絡し、内陸部の輸送に利用されている点では、昔と変らない。

それにもかゝわらず河川交通のない日本が近代化にふみ切って一世紀たった今日、国民総生産が自由諸国中、世界第二位にのし上ったことは驚くべきことだと、内外の注目を浴びている。一体原因は何んであろうか。外国の知識人もいろいろの角度から焦点をあてているが、その中の一に、日本の港は、すべて海に直接面しているからだと指摘した学者がいる。この単純、素朴なそして大胆な見解を知って、私は世界地図をひろげて見、新に日本の地図をたしかめて見た。

狭い一地方でも原理は同じである。葛港が直接豊後水道に面した港であることは、時代に応じて、質的に機能を変化しつゝ、以前よりまして佐伯地方の発展に寄与していることは事実である。

さて葛の地名に関しては、佐藤蔵太郎氏の「佐伯港発達史」は「此辺の荒磯は元葛川と呼び居るを、何時しか口音を抜きてカヅラとは呼び做すに至り居るなり。因ってカヅラには何の意義もなく、川面は鼻面林と同様、地